『教祖伝』探究（2）

「ひながた」の前章

おやさと研究所長
深谷　忠一　*Chuichi Fukaya*

教祖が月日の社に定まられてから最初になされたことが、「貧に落ちきる」ことであったのは、誰もがよく承知していることでありましょう。

最初は、教祖ご自身がお嫁入りなされた時の荷物などを施されたのですが、だんだんと中山家先祖伝来の家財に手をつけられ、最後には農家のいのちである田畑や、家の象徴であり生活の基盤である母屋などの不動産まで手放して、貧しい人々に施し続けられたのであります。

この「貧に落ちきる」ひながたから悟れることは、

1．富者は目の前の貧者に施しをして救済するべしである。
2．世界だすけのためには、貧者の気持ちを共有する必要がある。
3．門地、身分、社会的立場を離れ、神にもたれる信仰を確立することが大事である。
4．物への執着心をなくすのが、陽気ぐらしへの入り口である。

等であろうと思いますが、この貧に落ちきられる“ひながた”の意味については、幾多の論者がまだまだ種々の観点からの意見を発表されているところですし、この連載でも後にさらに詳しく探求するつもりであります。

しかし一方、そのような貧に落ちきる“ひながた”の分析・理解は、今の我々・後世の者だから申せることであって、当時の中山善兵衛様の立場に立てば、まことに容易ならざることだったと推察されます。

今の時代においても、妻が嫁入った家の財産を自分の都合・裁量でどんどん売却・処分をしたりすれば、すぐに離婚騒動になるのではないかと思われますが、この教祖のご事跡は江戸時代末期のことであります。家を護り続けることが人生の目的であり、そのためには女性の人権など犠牲になるのが当たり前だった時代です。夫の方から三下り半を渡せば何時でも離縁ができたとされる時代です。それなのに、嫁入ってきた妻に財産を無くされた夫善兵衛様が、何故離婚を申しわたされなかったのか。考えれば不思議なことではないでしょうか。

もちろん、“それは、親神様がそうなされたからである”といえばその通りであり、“「月日のやしろ」の教祖が、元のぢばのある中山家から離れられるようなことは起こりえないのだ”といえば、そうなのであります。立教の時の親神様と善兵衛様のお約束があったといえばそうなのであります。

しかし、“ひながたから学ぶ”という立場に立てば、善兵衛様が、離婚という最終手段を取られなかった奥に、みき様が「月日のやしろ」になられるまでの間に培われた、お二人の夫婦の絆の強さがあったことにも注目すべきではないかと思うのです。善兵衛様が白刃を抜いて教祖に迫られたこともあったことを考えれば、善兵衛様の心が揺らいだこともあったと推察できるのですが、それが決定的な破綻に進まなかったのは、親神様との約束もさりながら、人間善兵衛様のみき様への深い愛情・信頼があったからだと思うのです。

別の観点から申しますと、“教祖は人間創造の時の母親なる魂をもって生まれられたお方”であります。そして、天理教は親神による啓示宗教でありますから、教祖が特殊な修行や人生経験を積み重ねることが、立教の必要条件ではありません。ですから、考えようによっては、みき様はもっと若くして教祖になられても差し支えはなかった。つまり、立教の元一日は動かせない日だとして、みき様の誕生が天保９年にもっと近づいた日でもよかったのではないか。むしろ、当時の様子からすれば、中年の主婦より若い未婚の女性が「月日のやしろ」になられた方が、家人や村人たちには容易に受け入れられたのではないかとも思えるのです。

しかるに、みき様は、「月日のやしろ」におなりになるまでに、40年という決して短いとはいえない年月を、いわば普通の人間として過ごしておられます。そして、その人間みき様として過ごされた40年の道中が、当時の女性として非の打ち所がないものであり、夫善兵衛様の奥様としても素晴らしいものであったということです。その事が、教祖が「月日のやしろ」におなりになった後に、如何に当時の人たちの常識を越えた行いをなされても、夫様がそれを理由に三下半を突きつけられなかった大事な理由ではないかと思えるのです。

さて、お道の信者の中には、「自分は一生懸命信仰しているのに、家族の誰もが無理解でお道についてきてくれない」などという人がいます。本人は、自分は模範的な信者のつもりでいる。自分の長年の信仰があるから、一族の者も皆結構に過ごさせて頂いていると信じている。ところが、いざ、家族・親族に信仰を勧めてみると、皆が自分の言う通りについてきてくれないと嘆いているのです。

しかし、そこで考えねばならないことは、嘆いている人の信仰者たる一人の人間としての信頼はどうかということなのです。教会では模範的でも、“家庭人としては疑問符がつく”とか、“社会人としてのモラルに欠けている”などというのでは、いくら立派なことを言っても聞いてもらえないのは当然です。つまり、一人の人間としての姿が問われるということなのです。

教祖は、人間中山みき様としての40年、ひながたの道のプロローグとしての年限も、人々から称賛される道中を通られた。ご幼少の頃の言動も、中山家の主婦となられてからの日々のお姿も、完ぺきなものであった。我が身・我が子のいのちを差し出して隣人の子供をたすけられた事をはじめ、人として誰にも真似ができない人生を送られた。そして、その上で、人間の常識を突き抜けた「ひながたの道」をお示しくだされたのであります。

しかるに、我々お互いは、道のご用を言い訳にして家庭や社会の常識から逸脱することをしたり、逆に、家庭や社会の用事を言い訳にして道のご用に徹しきれないことが多いのではないか。人間としての通り方も中途半端、信仰の道にも徹底できないという姿を省みずに、周りの人たちが自分のことを理解しない、信仰の話を聞いてくれないなどと、嘆いていることが多いのではないかと思うのです。

“教祖も長年にわたって皆に反対される中を通られた。私のような者が人様に簡単に話を聞いてもらえなくて当然だ”と思って自らを励ますことも、ある面では必要なことですが、しかし、それで、“自分も教祖と全く同じ道をたどっている”などと考えるのは、思い上がりだと思うのです。

おさづけを頂いた後に渡される「おかきさげ」の最後に、

「又一つ、第一の理を諭そう。第一には、所々に手本雛形。諭す事情の理の台には、日々という、日々には家業という、これが第一。」

と記されています。

お道を真剣に通り始めれば、家庭を顧みる時間がなくなることもあります。普通の社会人としてのお付き合いが、物理的にできない時もあります。しかし、その人の日々の人間としての有り様が、“所々に手本雛形”として誰からも信頼されるものであるのなら、身近にその姿に接している人には必ず分かってもらえるはずなのです。

世界だすけの道を歩むためには、先ずは、家庭人・社会人としての信頼を得ることが大切だと「ひながた」から学ぶのであります。